瀕死の日記

二〇二二年八月

春巻

八月一日（水）

職場の卓上カレンダーを八月に変える。
祝日が全く無いことに愕然となる。
しかし、コンビニの店長よりはましなんだろう、と自分を慰める。
月月火水木金金が一年中ずっとの人種だ。
生きてて嫌にならないのかな？
魔が差したりしないのかな？

八月二日（木）

三九・二度まで測って、もう測るのを止めた――これ以上測っても無意味だ。
もう、体温計を腋に挟むだけでもしんどい。
寝返りがこんなに体力を必要とするとは。
やっとのことで立ち上がったら、体温がさらに上昇していくのがよく分かる。
きらきらと無数の星が舞っている。
このまま死ねるのかな、と思ったので、救急車は呼ばなかった。

八月三日（金）

今日は特別な人の誕生日だ。
その特別な人は残念ながら、既に残念な年齢に達している。
だから病み上がりの私は、軽く、おめでと、と言った。
すると特別な人は、軽く、ありがと、と返した。
それでこの話は終わりだ。

八月四日（土）

たん熊北店で松花堂弁当。
ようやく私は固形物が食べられるようになった。
まだ量はあまり食べられない。
この小食状態が死ぬまで続けばいいのにな、と絵空事。
ラッパーのBig Punは肥満で死んだ――こんな死に方だけは嫌だ。

八月五日（日）

苛々する。

苛々する時、私はひたすら寝る。

いら、いら、いら～♪、とはっぴいえんど。

この曲は空気公団がカバーしているが、私はそっちの方が好きだ。

しかし、苛々している時に音楽なんぞ聴く気にはならない。

八月六日（月）

ふと、めふん、を食べてみたい、と思った。
まだ少し体がだるいので、念のため今日まで会社を休むことにした。
エアコン、ごろごろ、扇風機。
ああ、めふん。
め、ふん。

八月七日（火）

久々の出社だが、みんな当たり前のようにスルー。
私は中断していた社内規定の見直し作業に入った。
規程？
いいや、それは実態とかけ離れた、ただの見栄と虚飾の塊。
お前はまるで、要領のいい気楽なサラリーマンのようだ。
ホテイアオイ。

八月八日（水）

エシャレットには味噌マヨ。
スーパーでエシャレットの束が九八円だったので、三束も買った。
これで今日も、明日も、あさってもエシャレット。
ああ、約束された幸せ。
犬や猫、多くの動物がこれを食べたら死ぬなんて。

八月九日（木）

長崎への原爆投下から六七年。
その間、被爆者は原爆の悲惨さを訴え続けた。
悲惨だ、だから核を廃絶せよ、と。
しかし、悲惨な結果をもたらすからこそ、各国は核を開発しているのだ。
長崎生まれの私は思考停止の反核活動家たちを苦々しく思う。

八月十日（金）

饒舌になってるぞ。
ホラ吹き鴉になってるぞ。

八月十一日（土）

日焼けした二十歳前後の若者の肌は、どうしてもうんこを連想させる。

八月十二日（日）

夜、大きな羽虫が勢いよく部屋に入ってきた。
恐怖に逃げ惑う私。
自室に入ったところを、扉を閉めて閉じ込めた。
居場所を失い、戸惑う私。
皿を洗った。

八月十三日（月）

悲しい、と、死にたい、は似ている。
神田でフーゾクのサンドイッチマンを見かけた。

八月十四日（火）

自転車の路上駐車を見張っている雇われ爺さんたちは、心が病んでいる。
日陰で嫌な目つきをしている。
自分が正義だと勘違いしている。
まったく、七〇年前後生きてきた結果が、これなのか。
梅の木はきれいな葉をつけているという　のに。

八月十五日（水）

毎日見ているその木の名前が、プラタナス、ということを知った。
忘れないように手帳にメモした。
恥ずかしいくらいに知らないことが多すぎる。
でも、今日は終戦記念日。

八月十六日（木）

バス停で中年の男がぶつぶつ意味不明の言葉を発し続けていた。
その意味不明の言葉は止むことがなかった。
そして、バスが来る前に男はぶつぶつ言いながら去って行った。
暑い。

八月十七日（金）

韓国人は自尊心が低すぎる。
中国人は自尊心が高すぎる。
そして日本人と台湾人は両極端を嫌う。
おととい、終戦の日、なんとなく思ったこと。
こういう、十把一絡げな短絡的意見はよくないんだけれどね。
死に神はそんな風にしむけるのかな？

八月十八日（土）

前から気になって仕方がないのだが、
藤子・Ｆ・不二雄氏の描く笑顔は、目が見開かれたまま、黒目を細めている
――いくら漫画でもありえないんじゃないかこれは。
もう何十年もそう思っている。
たぶん死ぬまで私はそう思い続ける。

八月十九日（日）

睡眠薬代わりの薬を一錠減らしたら、凄く早く目が覚めた。
だが、ラジオ体操にはまだ間に合わなかった。
ベランダの植木に水をあげた。

八月二十日（月）

禁煙して、今日で二年。
いまだに時々吸いたくなる。
かぐわしい副流煙。
十八歳の思い出は、いつも煙草の煙とともにあった。

八月二十一日（火）

がらの悪い、空威張りの小者の人物に、私はよく睨まれる。
今朝も睨まれた。
そんなとき、私は礼儀として目をそらす。
だから睨まれてしまうのだろうか？

八月二十二日（水）

電話は苦手だ。
電話は嫌いだ。
否応なく心に食い込んでくる声というものが、みんなは怖くないのだろうか。
音の振動だけなのに、人間よりも実体。
そういえば、嫌な人ほど軽々しく電話をかけているような気がする。

八月二十三日（木）

四谷ゼミナールの電車広告の、右端で両拳を握っている男性が、
痩せていて、
頼りなさそうで、
今にもよろめきそうで、
とてもいい味を出している。
画像をお見せできないのが残念でならない。

八月二十四日（金）

給料日。

花でも買おうか。

花泥棒。

八月二十五日（土）

「元気でね、いつまでも」
なんて残酷な言葉だ。
私でなくても死にたくなるよ。

八月二十六日（日）

深夜、眠れないのに頭は眠っている。
扇風機にあたってあくびをする。
こんな時、ぬいぐるみたちが歩き出せばいいのに。
首が一回転すればいいのに。

八月二十七日（月）

夜がうまくいかない。

虫を潰す。

八月二十八日（火）

死というものは、
可能性として
そこら中に転がっている。
陽気に闊歩するあの若者達も、
ベンチに座って目を閉じているあのホームレスも。

八月二十九日（水）

変な夢を見た。
夜、たくさんの鯉が住む大きな池で、
大きな鯉が自ら陸に上がり、まさに死のうとしていた。
元気な鯉が尾ひれで地上を歩き、干物を次々と頬張っていた。
小さな鯉が水槽にいて、触るとヒドラのような形に変化し、輝き、消えた。

八月三十日（木）

口論は疲れる。
そして心が沈む。
生きているのが嫌になる。
こんな時、言葉を持たない動物が羨ましくなる。
こんな時、無邪気な幼児の笑顔があれば、と思う。

八月三十一日（金）

さようなら、何もなかった、私の八月！